

特別支援教育実践研究会第4回実践研究発表会 発表要旨

開催日時：平成27年11月14日（土）15：15～17：00

於：上越教育大学特別支援教育実践研究センター

【発表1】

特色ある交流及び共同学習（2）

廣田稔・大島貴子（十日町市立ふれあいの丘支援学校）・村中智彦・齋藤一雄（上越教育大学）

当校は、平成25年度に十日町小学校、ふれあいの丘支援学校、市発達支援センターの三施設が、共生の理念の実現を目指す「夢の学校」として誕生した。当校の交流及び共同学習は、①併設の十日町小学校との連携による積極的な交流により、地域の中で共に生きる社会の基盤づくりにつとめる、②様々な人たちと活動を共にする中で経験を広げ、豊かな人間性の基礎を育む、を基本方針に推進している。交流及び共同学習の発展的な継続を通して、子どもたちは障がいのあるなしにかかわらず、共に学ぶ喜びや楽しみを感じている。十日町小学校との主な取組は、学校行事では、城ヶ丘ふれあいカーニバル（運動会）、城ヶ丘ふれあいフェスティバル（文化祭）、やまびこ班（縦割り班）活動などがある。交流の中心となる4年生とは、給食、授業、休み時間などにおいて様々なかかわりをもつ。本発表では、今年度の取組について紹介する。

【発表2】

知的障害児を対象とした「音楽」に関する教材開発

齋藤一雄（上越教育大学）

知的障害児を対象とした授業において、様々な楽曲が鑑賞、身体表現、器楽、歌唱等の音楽活動で使用されている。しかも、対象とする知的障害児の実態や授業のねらい、指導者の考え方などによって、楽曲の表現方法、演奏の仕方、鑑賞の仕方についても様々である。そこで、対象とする知的障害児の実態に合わせて、曲の自作や楽曲の編曲、表現方法の工夫などが行われている。その例として、授業を始めるときの歌、指導者に注目してもらいたいときの歌、三角形の描き方を説明した歌、タイミングを合わせるための曲、楽器を練習するための楽曲などの自作をあげることができる。また、具体的なイメージを持てるようにしたリズム運動のための組曲、児童生徒の演奏しやすいテンポの設定やテンポ変化、演奏効果を盛り上げるための小さな工夫なども行ってきた。ここでは、自作曲「おながくはじめます」「わたしをみつめて」「さんさん三角」「ツリーチャイムをならそう」、リズム運動「水族館へ行こう」、合奏「大きな古時計」「くまさんおどれ」を紹介する。

【発表3】

教育雑誌「信濃教育」における長野尋常小学校の特別学級実践報告に関する史的研究

中嶋忍（上越教育大学特別支援教育実践研究センター協働研究員）

明治時代の長野県教育は、日本における知的障害教育の初期形態を形成したと考えられている。これは、松本尋常小学校の学力最下位学級と長野尋常小学校の晩熟生学級である。これらの実践は、現在の障害児教育史研究において明らかにされている。しかし長野県の教育雑誌「信濃教育」に実践論文を発表したのは、長野尋常小学校の学級担当者であった小林米松と篠原時治郎が最初である。実践論文は、小林・篠原の『鈍児ノ教育』（明治33年掲載）と小林の『鈍児の教育方法』（明治35年掲載）という大規模校での学力劣等児童（鈍児）教育に関する取り組みであった。本研究は、長野県内に発表された学力劣等児童への教育方法がどのような視点から報告していたのかについて、1.『鈍児ノ教育』における実践報告、2.『鈍児の教育方法』による教育方法の紹介、に焦点を当てて、当時の特別学級教育の考え方を明らかにしたい。

【発表4】

書字を苦手とする児童への支援方法について

井上和紀（新潟市立中野山小学校）

書字を苦手とする児童がいる。本人も「俺は書くのが苦手なんだよ。」と言い、苦手意識をもっている。その児童に対して、特別支援学級で国語と算数を中心に教えている。書字に対して苦手意識をもっていることから、書字への意欲が低くなっている。このことから、書字への意欲の向上と苦手意識を減らすことを目的に実践を行っている。空間認知の能力を見るため、図工の絵画作品を検討した。絵画作品の制作でも苦手意識が見られ、絵を描くことを嫌がる様子が見られた。一方、ペグ差しやアイロンビーズを使っての活動には意欲的に取り組んだ。作品も、本人にとって自信をもって人に見せられるものとなった。これらの活動を取り入れることで、空間認知能力を高め、絵画を描くことに対する抵抗感を減らし、書字に対する苦手意識を払拭できるよう、実践を進めていきたい。

【発表5】

通級指導における特別な教育的ニーズのある児童の行為プランの改善に関する実践的研究

芦口玲子（福島県南相馬市立石神第二小学校）

特別な教育的ニーズのある児童は、その特性から他者との関係をうまく築けないことが多い(文科省 2004)。そのため自分の行為に関する評価を受け取りにくくなり、結果として自分の子なった行為を客観的に捉え直すことができず文脈に合わない行動をとり続けてしまう。その行為プランの改善のために支援者が意図的に構成した小集団を活用し、支援者が一緒に協同学習を行う中で①言語化と②活動の振り返りが行為プランの改善に有効であることが示唆された。この知見を平成 26 年度 1 年間実際の通級指導教室における個別指導において活用したところ、通常学級担任や家庭との情報共有の必要性が新たに示唆された。

【発表6】

小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の

他者との係わりの変化を促すための支援課題（その2）

石田脩介・植村祥子・小出芽以・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

特別な教育的ニーズのある児童の他者とのかかわりの変化を促す際の支援方法の開発では、他者とかかわる必要性のある課題を提示し、その課題の遂行過程において観察される援助要請、援助提供、相互学習の様子を分析することが必要である。本研究では、このようなかかわりの変化を促すために開発した課題の中から、「寿司置きねえ！」課題について紹介する。この課題は各自が得た情報をグループの構成員で共有して整理し、お寿司の並び順を決定していくという課題であった。その遂行過程においては、単なる配置の相談のみならず、絵で描かれた情報カードの読み取りや解決のためのヒントカードを使用するタイミング、ヒントカードとスペシャルヒントカードのどちらを使うかなど、様々な相談が必要であった。

【発表7】

小集団支援場面における特別な教育的ニーズのある児童の 情報伝達方法の調整を促すための支援課題

加藤裕貴・川住文博・戸澤なつみ・池田吉史・大庭重治（上越教育大学）

他者に何かを伝えようとする際には、聞き手である他者に応じて伝え方を調整する技術が不可欠である。しかし、特別な教育的ニーズのある児童は、他者理解の困難に伴い、情報伝達の調整が困難であると考えられ、相手の反応に応じた調整を促すための支援が必要である。本研究では、このようななかかわりにおける他者を意識した情報伝達の獲得を促すために開発した課題の中から、「迷子探し」課題について紹介する。この課題は、グループの中で情報係と絵描き係に分かれ、情報係が絵描き係に対して見本の顔の状態を言葉だけで説明し、絵描き係はそれを聞いて、できるだけ見本通りの顔の絵を完成させる課題であった。また、伝える活動の後には、完成した似顔絵を見ながら、たくさんある顔の中から正解の迷子を探し出すことが求められた。

【発表8】

知的障害者の学習支援における実行機能概念の適用可能性

大庭重治・中村潤一郎・小林里美・池田吉史・八島猛（上越教育大学）・葉石光一（埼玉大学）

従来、知的障害者に観察される課題からの逸脱傾向は、文脈に合わない反応を抑制する事の困難と捉えられ、その抑制機能の形成が検討されてきた。しかしながら、共同活動者の演示や視覚の手がかりによって課題に立ち戻り、最後まで取り組み続ける様子は、必要な情報に再びアクセスすることによる情報のアップデートングによって、抑制機能を補い得る可能性を示唆していた。そこで、本研究では、学習場面における活動からの逸脱に対する支援方法を実行機能概念に基づいて策定し、アップデートングによる抑制機能の代行可能性を実践的に検討した。

【発表9】

健康の維持に特別な支援を必要とする児童生徒を対象とした

発達支援教室における活動内容の紹介

百瀬翔悟・三瓶竜太・久保恭子・岩崎俊大・小室良枝・清水莉里・弓場ひかり・八島猛・大庭重治・笠原芳隆
（上越教育大学）

発達支援教室は、健康の維持に特別な支援を必要とする児童生徒を対象とした個々のニーズに応じた発達支援および保護者を対象とした教育相談の場である。支援スタッフは大学教員と大学院生から構成され、1回/月、3時間程度の活動を行っている。この教室は、大学院のカリキュラムの中に病弱臨床実習の授業として位置づけられており、支援にかかわる大学院生は受講登録がなされている。平成23年9月からA大学特別支援教育実践研究センターにて開催され、今年度で4年目を迎える。対象者はA大学近隣の教育委員会の協力により、3市の全小学校を対象として公募し、現在では、小学4年生から中学3年生までの児童生徒6名が参加登録している。本稿では、発達支援教室の概要と参加している児童生徒を対象として実施された活動内容の一部を紹介する。

【発表 10】

特別支援学校から一般高等学校に転籍した生徒における学習動機づけの変化とその支援

雨田卓朗（独立行政法人国立病院機構新潟病院）・久保恭子・百瀬翔吾・八島猛・大庭重治（上越教育大学）

本研究の目的は知的障害のある生徒Aに対して行われた学習支援の経過と学習動機づけ尺度および学業コンピテンス尺度の得点に基づき、Aの学習動機づけを維持・向上するための支援方法を検討することである。支援期間はX年11月～X+1年11月であった。支援当初、Aは特別支援学校に在籍していたが、一般高等学校への進学を希望し、受験を経てX+1年4月から一般高等学校に転籍した。支援者は1～2回/週の頻度で主として教科学習支援を実施した。支援期間中、Aの学業動機づけと学業コンピテンスを3回測定した（高等学校受験直前・高等学校前期終了時・高等学校後期の支援終了時）。支援経過と尺度得点の変化から、Aにおける学習動機づけの維持・向上において学習に対する価値観の変容を促すための支援とAの特性に応じた学習支援が重要であることが示唆された。

【発表 11】

ADHDを併せ有する聴覚障害児の格助詞の指導に関する事例的研究

小林優子（上越教育大学）・近藤優樹（埼玉県立特別支援学校羽生ふじ高等学園）

本研究では①ADHDを併せ有する聴覚障害児1事例についてどのような文理解方略を用いているか明らかにする、②その聴覚障害児を対象に格助詞「が」「を」「に」の定着を図るための指導の有効性の検討を目的とした。対象児は小学校難聴学級に在籍する男児A(当時小学2年生)で、両耳補聴器装用時の平均聴力レベルは44dBであった。文理解方略については、絵と文のマッチング方略（絵の左側の人物が動作者、右側の人物が対象者と解釈する）および語順方略（文中の単語を一律に「動作者⇒対象者」と解釈する）を多く用いていた。また、絵などの視覚刺激を用いると注意が持続しやすいことから、文の内容を示す絵を教材に用い、「誰が（に）○○した？」などの言葉かけを行い動作者・対象者が誰であるのかA児に意識を向けさせる指導を行った。その結果、マッチング方略・語順方略ともに出現率が低下し、選択問題での正答率が上昇した。